

信じる者が見たもの

(ヨハネ一・一〜四五)

「アパートではなく保育園にしたら」時は一九七六年のこと。当時三十三歳の若き伝道者は考えた。親族の財産管理の一助としてアパート経営の手伝いをするという計画があつたのだが、経営なら保育園でも一緒。そうすれば毎日子どもたちに聖書を教えることが出来るというのだ。だがそれがはいかにも素人考え。第一彼女に保母資格（当時）はない。案の定、役所の担当者には一顧だにされず、教団でも「（直接）伝道にならないことをやるだなんて」とお小言を言われる始末だつた。そんな時彼女に与えられたみ言葉が今朝の物語の一節、「もしあなたが信じるなら、あなたは神の栄光を見る」であつた。このみ言葉に奮い立ち、彼女は計画を推し進め、一九七七年六月、山手町教会付属こひつじ保育園はついに誕生した。信じたものは確かに神の栄光を見たのである。

これは確かに美談であるが、聖書のコンテクストからは離れている。そこで今朝はまず当該箇所におけるマルタとイエスの対話を通して、信仰と神の栄光について考えてみたい。

一、マルタの信仰告白

ルカ福音書の「マルタとマリヤ」の影響か、私たちはどうかすると、このベタニアの三兄弟のなかでマルタの信仰を小さく見てしまいがちであるが、二一節から始まるマルタとイエスの対話を見るとマルタのイエス理解と信仰はなかなかのものである。まずマルタはイエスと神との間にある親密な関係についてよく知っており（二二節）、それを根拠にもしイエスが弟ラザロの死の前に到着しておれば、弟は助かつたと語つた。次にマルタは終末におけるよみがえりを信じていた。勿論これは正統的なユダヤ教においてよく教えられていることであつたが、彼女はそれをよすがにして弟の死に向き合っていたと考えればこれまた信仰である。更にマルタはイエスが「わたしはよみがえりです。いのちです」と自らが神のいのちそのものであることを宣言したときに、「はい。主よ。私は、あなたが世に來られる神の子キリストである、と信じております」と応答して信仰をあらわした。イエスが在世中にこのような信仰告白に至つたのはヨハネ福音書ではマルタのみであり、四福音書を通してこれに比肩する明瞭な信仰告白はマタイ福音書におけるペテロくらいであろう。そう考えると彼女を単なる「パニクつたお姉さん」とだけ考えるのは早計である。

二、イエスのチャレンジ

マルタとの対話の後、マリヤと話されたイエスは、ラザロの墓の前で、罪のゆえに人間に定められた死の悲しみに共感して涙するとともに、その死を征服してご自身の栄光を現すために「その石を取り除けなさい」と語つた。その時マルタの口からでた言葉は「主よ。もう臭くなつておりましよう。四日になりますから。」であつた。彼女は先に自らを信じる者は死ぬことはないと言つたイエスを救い主として信じると言つたのではなかつたかと考えると、これはどうしたことかとも思う。しかし人の信仰とは常に弱さと強さが同居するもの。かのペテロにしても、素晴らしい信仰告白のすぐ後に「サタンよ退け」と叱責されていることから考えれば、これこそ人間の現実と考えるべきだろう。だがイエスはマルタの信仰がそのまま後退することを許さなかつた。むしろ「もしあなたが信じるなら、あなたは神の栄光を見る」と言つて、彼女を奮起させたのだ。果たしてマルタは恐ろしくはそこにいた男たちに「イエス様の言うとおりにして下さい」と言つて、いのちの君と死に征服されているラザロを隔てていた障壁を取り除けた。チャレンジに応えたのだ。確かにそこには「信じる」という言葉はない。だがそこに彼女の信仰を見るのはたやすいことだ。そこには主のこ

命令に対する服従があつたからである。

* * *

それから幾星霜。「いつつぶれてもおかしくない」と噂された小さな保育園は四十年の物語を紡いだ。三三歳だつた園長は七三歳になつた。神の祝福を受け、人に喜ばれた。しかし少子化の波の中、これからの保育園をどのようにしていくかは彼女にとっての大きな課題だつた。しかし今年、転機が訪れた。「二一歳の大きい〇〇二歳の保育所が足りないので、小規模保育事業にも参入しないか」と言うのだ。教会ではちようど乳児施設の改築を計画していたところ。「渡りに船」とはまさにこのことであつた。だがここには一つの問題が横たわつていた。これをやるには教会独自で宗教学人格を持つてることが大前提だといふのだ。宗教学法人の設立は手間も力ネもかかる大変な仕事だ。しかしこれを主からのチャレンジと信じた大坂清子牧師は四十年前同様、積極果敢に行動した。信じた結果はもちろん神の栄光。なんとこの二日前、宗教学法人格の認証を得たのである。ハレルヤ！イエスは弱い私たちにチャレンジを与え、その信仰の火を燃え立たせて下さるお方。さあ主のことに応答しよう。そこにいのちがある。